

40～64歳のひきこもり状態の人が全国に61.3万人。内閣府による初の全国推計が公表されたのは3月末です。ひきこもる中高年の子と高齢の親が孤立する「8050問題」は深刻さを増し、こうした家族が関わる痛ましい事件も起きました。私たちは、この問題にどう向き合えばいいのでしょうか。

## 我が事として考えて

ひきこもり経験のある仲間と映像制作などの会社を立ち上げた長井岳さん(43)に、内閣府調査について聞きました。

調査結果には、ひきこもる人のうち、生きるのが苦しいと感じることがある人が49%、死んでしまいたいと思うことがある人が30%というデータがありました。長井さんは「自分も当時そう思っていたので、全く不思議ではない」と受け止めています。

当事者は、自己否定を繰り返してきた年月が長すぎて、どう助けを求めてよいかもわからないといいます。長井さんは「死にたいという当事者の声を行政として聞いたからには、どうすればその生きづらさの一つずつ解きほぐせるか、一緒に考えるサポートをしてほしい」と話します。

調査では、一度も働いたことのない人も2%いました。長井さんによれば、ひきこもる人の多くは、「働かないと人間じゃない」という意識

を内側に抱え、日々苦しんでいるといます。「私の周りの当事者も、中年になるまでに、どこかで無理をしてアルバイトを経験している。でも無理に職場に自分を合わせようとして大きなダメージを受け、力尽きた人も多い。私自身もそうでした」

内閣府調査公表や「8050問題」に関連する大きな事件などのニュースがなくなったら、メディアは一斉にひいてしまうのではないかと、ひきこもり当事者・経験者でつくる雑誌「HIKIPOS(ひきぽす)」のライターであるロングロウさん(36)はそう懸念しています。

「最悪なのはニュースのコンテンツとして『ひきこもり』が消費され、社会保障を圧迫するダメ人間という認識が固定化されること。異物を排除するような視点ではなく、『これって私や家族の問題かも』という目で、継続して取り上げてほしい。そうすれば社会で支援する流れができるはずです」



ひきこもり経験者たちで起業した長井岳さん(右)と山本菜々子さん

## 世代を問わず 就労で挫折がきっかけ

KHJ全国ひきこもり家族会連合会・共同代表 伊藤正俊さん



内閣府調査でわかったのは、ひきこもりが若者問題ではなく、すべての世代の問題だということです。

分析結果をみると、多くの人が就労に挫折してひきこもり状態に至っていることがわかります。就労への恐怖感、困難感を取り除いていく、息の長い「生き方支援」が必要です。

雇用環境はなお厳しく、一般企業への就職を前提にした画一的な就労支援では、ひきこもりから脱するのは難しいとされます。その人の状況や特性にあった職場環境をさがす。見つからなければ、新たな「仕事」

を創造していくような支援も求められると思います。多様な生き方が保障される社会を準備しなければいけません。官民協働で取り組む必要があります。

元農水次官が長男を殺害したとされる事件は、家族会で活動する私たちには自分の身にたまされる出来事です。だからこそ、悲惨な事件にならない取り組みが必要です。孤立する家族を支える家族会活動、訪問支援、居場所づくりなど、家族会には具体的な支援のノウハウがあります。国や自治体には、ぜひ家族会の意見を採用した政策をつくってほしいと思います。

## 支援りたい、親の不安つけこむ業者も

ひきこもり支援施設に対する賠償訴訟の弁護士 林治さん



ひきこもりの人の自立・就労支援をうたう東京都内の施設運営会社を相手に、元入所者の30代男性が550万円の賠償を求める裁判を2月に起こしました。入所者からのSOSで、私たち弁護士が、中高年の当事者を含む数人を「救出」しました。

原告の証言では、父親と一緒に部屋に入ってきた数人の男に無理やり家から連れ出され、施設では当初、監視つきの部屋で軟禁状態に。恐怖感から食事に手がつけられなかったと

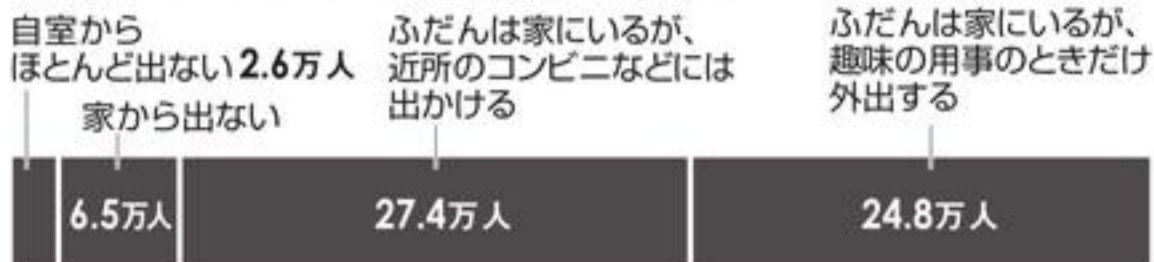
ころ、精神科病院に入院させられたそうです。研修も半年で数百万円という費用にみあった内容とは思えません。行政の監視の目も届きません。

高齢の親ほど将来不安は強まります。わらにもすがる思いでこうした施設と契約していますが、本人の意向を無視した連れ出しは支援とは呼べず、むしろ親子の溝を決定的に深めてしまいます。川崎殺傷事件などでひきこもり問題が注目され、親の不安につけこむ業者が増える恐れがあります。裁判を通じて社会に問題提起したいと思います。

## 中高年のひきこもり61万人実態は?

(推計61.3万人の状況)

以下の状態が半年以上続いている



内閣府調査の「ひきこもり」定義

Step1 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

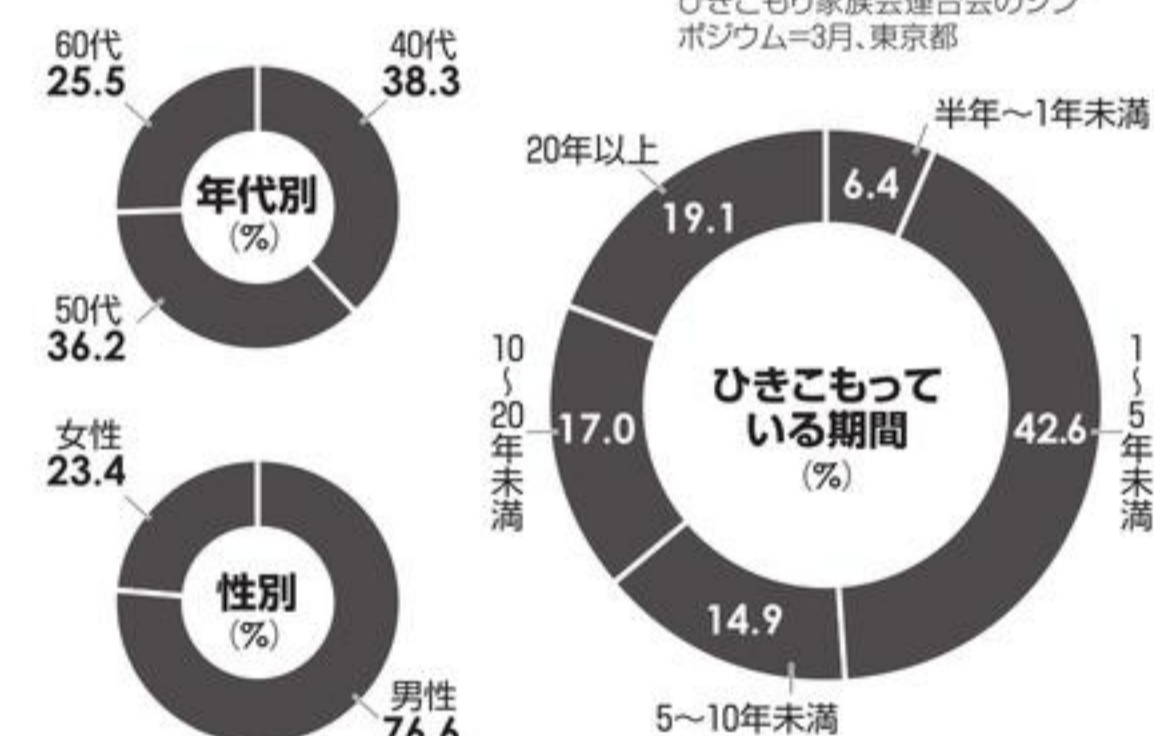
- ① 仕事や学校で平日は毎日外出する
- ② 仕事や学校で週に3～4日外出する
- ③ 遊び等で頻繁に外出する
- ④ 人づきあいのためにときどき外出する
- ⑤ ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する
- ⑥ ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける
- ⑦ 自室からは出るが、家からは出ない
- ⑧ 自室からほとんど出ない

Step2 ⑤～⑧を選んだ人で、その状態が半年以上続いている人

・身体的な病気や、家で仕事をしている人は除く  
・専業主婦(夫)、家事手伝い、介護・看護などを行っている人で、最近半年間に家族以外の人と会話かほとんどなかった人は含めて



「8050問題」を考えるKHJ全国ひきこもり家族会連合会のシンポジウム=3月、東京都



ひきこもり状態になったきっかけ(複数回答)



(各グラフなどはいずれも内閣府「生活状況に関する調査」(2018年度)から作成。全国の40～64歳、5千人を対象にした調査(有効回答65%)に基づく推計)

## 母親や既婚者も 女性の実態気づいて

「ひきこもりUX会議」代表理事 林恭子さん



20年ほどひきこもった経験をきっかけに、「ひきこもり女子会」を3年前から全国で80回ほど開いてきました。女性当事者同士、経験をただ聞いたり話したりする場です。参加する20～60代の肩書で見ると9割超は無職で、既婚者や母親も増えていきます。従来、「家事手伝い」や「専業主婦(夫)」は国の調査対象から除かれていたので、実態を反映して含めるよう求めてきましたが、今回から、最近半年間に家族以外との会話がほぼなかった場合は含められました。

ただ疑問なのは、ひきこもる人の

77%が男性という結果です。サンプルとなった当事者はわずか47人ですが、大阪府豊中市などでは、ひきこもりの半数超が女性という調査結果も出ています。

「ひきこもり=男性」のイメージが独り歩きしているのを危惧しています。男性は女性より学歴や職歴の重圧が強いからと言う専門家もいますが、今の時代、女子会に来る当事者で「正社員で働けなければ死ぬしかない」と言う人もいます。また、親の介護やきょうだいの子どもの育児手伝いをしながらひきこもっている人も大勢足を運んでくれます。彼女たちの存在も、見えなくなってしまうのでしょうか。

## そもそもの定義は?

カーテンを閉めきった部屋でゲーム漬け、昼夜逆転で髪はボサボサ。『そんな極端なひきこもり像がメディアで流布しているため、あてはまらない当事者がいると『やらせ』『ニセヒキ』と言われてしまう。20年以上のひきこもり経験がある人もひきこもりに含めて推計しています。こうした定義が報道で伝わると、それなら、ひきこもりではないのでは、との声もあがりました。

内閣府は、ひきこもり認定に関わる八つの選択肢全体を参照してほしいとしたうえで、「コンビニなどに出かけるといっても、家族以外との交流は前提としない外出を想定している」(北風幸一参事官)と説明します。KHJ全国ひきこもり家族会連合会の会員調査(2010年)でも、ひきこもりの程度で「自室に閉じこもっている」と答えたのは3%にとどまりました。

ひきこもりに詳しい関水徹平・立正大准教授(社会学)は、「働いていない自分には価値がない」などと自分を責め続け、死を考へるほど思い詰める当事者たちの自己否定感に注目すべきだといっています。「外出頻度とは無関係な、この問題に向き合わない限り、『社会参加』は遠のくばかりです」

## 「たまれる」場所用意を

精神科医 斎藤環さん



20年前に著書「社会的ひきこもり」がベストセラーとなり、今も当事者の診療を続ける精神科医の斎藤環さんに聞きました。

私がひきこもりの研究にかかわり始めた20年余り前には、不登校からの延長で至るケースがほとんどでした。数年前から就労経験後にひきこもるケースが急速に増え始め、今では逆転しました。こうした現実を受けて自治体や研究者からはひきこもりの半数が40歳以上という調査結果が次々と出ていた一方、国の調査は遅きに失したと思います。

全体の平均年齢を押し上げている彼ら、彼女らはいわゆる就職氷河期世代で、ブラック企業で疲弊し、ひきこもりに移行している現実があります。職場のいじめなどでひきこもらざるをえない状況に追い込まれており、私がふだん接する限り、自己責任とも、自分の意思でひきこもっているとも言えません。

私が約20年前にひきこもりという言葉を広めたのは、治療対象ではなく社会問題にし、当事者にも自分ひとりの問題ではないと安心感を持ってもらうためです。昨今相次ぐ事件を受けて一部の報道や世論に見られるように、犯罪者予備軍とみなして危険視するためではありません。

私は、ひきこもりは病気ではないと、あえて言い切ってきました。何らかの精神疾患の診断名は無理につけられるかもしれませんが、あまり意味を持たない。半年以上誰とも話さないような孤立状態であれば、大半の人は心身の健康を崩すでしょう。だからこそ、真つ当な人が追いつめられているだけと見るべきです。そうすれば、彼ら、彼女らが持つ潜在的な力や健康を引き出せると思います。

まずは、就労や勉強などの目的を持たずに、自助グループやデイケアなど、望む人が「たまれる」場所を用意する支援が大切です。人に慣れ、親密な関係とはどういうものか思い出してもらったりハビリの場づくりにも、人もお金も投入するべきです。

親が語るひきこもり。子どもからみたひきこもり。取材して受ける印象はまったく違います。中高年の当事者が関わる事件が起これば、また特定のイメージが拡大します。ひきこもり問題とは何か、まだ私はつかみきれていません。実像は見えにくく、親子の葛藤、介護、生活困窮など様々な困難をはらんでいます。内閣府調査は、巨大な問題の粗いスケッチです。各地域できめ細かな実態調査を積み重ね、本人と家族のSOSをキャッチし、中高年ひきこもり問題を「社会化」していくことが不可欠だと感じます。(編集委員・清川卓史)

部屋に閉じこもり、ドアの外から食事を差し入れてもらう若い男性——。身内に中年女性の当事者がいる私でも、こうしたひきこもり像に縛られていることを取材の度に自覚させられます。「ひきこもりです」と言う人の話を聞くと、コンビニだけでなく外出していたら、主婦だったら、「それはひきこもりなのか」と反射的に思ってしまうからです。林恭子さんの「自分をひきこもりと認めるのはとても難しい。その高いハードルを越えて自認する人の生きづらさは重く見るべきです」という言葉が、ずしりと響きました。(田淵紫織)

23日は「薬物依存への対応」を掲載します。